マルセルとハイデガーにおける実存と存在についての考察

塚田　澄代

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科
健康科学専攻　社会・行動医学講座　心身歯科学分野

Thoughts on Marcel's and Heidegger's Concepts of Existence and Being

Sumiyo Tsukada

Department of Psychosomatic Dentistry,
Field of Social and Behavioral Medicine, Health Research Course,
Kagoshima University Graduate School of Medical and Dental Sciences,
8-35-1 Sakuragaoka, Kagoshima 890-8544, Japan

Abstract

The philosophers Marcel and Heidegger, who were both active during the same period in the 20th century, examined the existence of human beings living here and now and going beyond that, searched for our essential being. In other words, they searched for the being based on existence. In this article both philosophers' concepts of existence and being as well as the relationship between these concepts were compared. For both philosophers a corrupt existence is daily existence where oneself is lost within superficial inquisitiveness. Marcel calls this the degradation of existence but at the same time acknowledges the exuberant experience of existence. However, for Heidegger, essential existence means understanding the meaning of the reality of death and accepting the anxiety associated with nothingness. In his later writings Heidegger does not question being from the point of view of existence but talks about being based on self-disclosure. Considering this point, Marcel holds Heidegger's achievement of recognizing the connection between the concepts of being and sanctity in high esteem. Nevertheless, Marcel regrets that Heidegger does not adequately evaluate a neighbor's concept, which approaches intersubjective being.

Key words: existence, being, death, exuberant experience, intersubjectivity

20世紀の同時代に活躍した二人の哲学者マルセルとハイデガーは，いずれも今ここを生きる私たち人間の実存の姿を反省し，それを超え本来の存在となる存在の探求と，実存の根拠となる存在の探求を行っている。しかし両者の間には実存や存在および両者の関係に関する見解の違いも見られることから，それらについて類似と相違を，マルセルがさまざまな著作の中で記しているハイデガー観を中心にして明らかにすることをこの小論で試みたい。

マルセルは，彼の思想全般の出発点とも言える彼自身の『形而上学的日記』と，ハイデガーの『存在と時間』との間に「本質的な歩みに関する類似点がある」[1]と述べている。マルセルによれば，これらの二つの著作は，同じ年に出版されたが，両者の間には影響関係は全くなかったにもかかわらず，である。その類似点とは，人間の実存において「存在」を一般に「忘れられた」あるいは「見失われた」とみなしていることである。

その後ハイデガーを読んだ後で，マルセルは，ハイデガーとのいくつかの類似を認めている。それらは，本来的な実存を覆っている日常的客観的道具的な経験に対立する現象学的反省，「世界内存在」としての「実存」の観念，「死に向かう存在」の不安，「存在」の神聖さ，「存在」の呼びかけなどである。しかしながら，私たちは，両哲学者の考察に意味のずれがあるのを見出す。

まず方法に関して，マルセルの方法は，前述語的真理を再発見するために，日常的な関心や技術をハイデガー流に括弧に入れる方法と同一ではないとしても，その根底においては匹敵する。「ひと(世人) [das Man]」[2]についてのハイデガーの記述の仕方は，マルセルが「人 [on]」という語によって，人間をその機能と同一視する傾向を見抜き，この危険性を現代世界の誤りや不幸として記述する仕方に対応している[3]。繰り返しの生活や表面的な好奇心の中に自己を喪失し，いかなる本来的な責任も負わない傾向にある日常的な無駄話に埋没する世人は，マルセルにおける「思考停止」あるいは「人間－大衆」に対応している。

したがって，両哲学者にとって，日常的実存は，ハイデガーにおいては存在の問いを忘れ，またマルセルにおいては存在の要求を消失させる「堕落した実存」である。

しかしながら，ハイデガーとは違って，マルセルは，「堕落が生じたであろうということに対して完全な状態」[4]を認めないことは難しいと考える。そしてマルセルは，「頽落を神学的な解釈ではなく，純粋に確認されたこととみなす」[5]というハイデガーの主張にもかかわらず，「原罪の観念が，ハイデガーの意識の背景に残っており，その観念は全く見分けられないほど世俗化している」[6]とマルセルは考える。ところが，このような世俗化に向かっているにもかかわらず，その思想は，「宗教的な，そしてキリスト教的でさえある霊気に包まれている」[7]。

マルセルにおいては，実存は，「存在の欠陥」，「亡命」として経験される。存在の欠陥は，[堕落した，つまり恵みを失った被造物に特有である]。しかし，彼はその反対の経験，つまり存在の充溢，その源が光である超越的存在に照らされた「光であることの喜び」[8]の経験があることを認めている。

しかしながら，彼はこの考えをキリスト教哲学者として神学から引き出しているのではない。確かに彼は，キリスト教的所与がいくつかの思想の開花を促すことに寄与したことを認めるが，彼が超越者を認めるように至ったのは，彼が人間経験の意味について考察を行ったことに基づいている。

したがって，本来的実存に関しては，両哲学者の相違は顕著である。ハイデガーにとっては，本来的実存は死の真の意味を深く理解し，有限性や無の不安と取り組み，それらを受け入れることである。死を常に待機することは，自己への「良心の呼び声」[9]，あるいは「気遣いの呼び声」[10]に対する答えであるが，それは真理の光と同一視される。

確かにマルセルは，「時間性の不安」[11]つまり生における死の不安を認めるという点において，ハイデガーに類似している。しかし，ハイデガーとは違って，彼は死を人間実存の絶対的な終わりと見ない。ハイデガーが考える死は，マルセルには，私たちの生のある道のりの終わりの表象，つまりベルクソンによって批判された空間化された時間に思われる。ハイデガーは，彼には，生を外から考察しているように思われる。そしてマルセルは，「気遣いの優位性を肯定する思想に支配されている」[12]ハイデガーの経験に還元できない真の経験の可能性を示す。それらは，「私たちは自分たちを永遠のものとして経験する」[13]と断言するスピノザによって証言される経験である。マルセルによれば，私たちが存在に到達するという意識をもつ愛・創造・瞑想において私たちが見出す充溢や喜びの経験を通じて，「永遠の約束」である「予言的な確信」を垣間見ることができる。これらの経験は，間欠的にもかかわらず，倦怠や絶望において私たちが先取りする死すべ

き運命に抵抗する可能性を証すように彼には思われる。

マルセルが「第二の」と名付ける反省の役割は，身体的存在としての人間が時間を生きるいろいろな仕方を現象学的分析によって明らかにすることにある。この第二の反省は，自然に生じる第一の反省に対して行われるが，それは第一の反省が意味するものを明らかにする。つまり時間の表象は通過した空間と同一視されることや，空虚で働かない意識は，唯物論が主張するように，私の死を意識の絶対的な消滅と考えるに至る衰弱し動揺した意識であることを明らかにする。次いで，第一の反省の批判によって，第二の反省は，存在することや不滅の確信，またそれらの確信が第二の反省への呼びかけであることを私たちに自覚させる。

テヴェナは，ハイデガーの「経験的なことや心理的なことを越えて超越論的な方向へ向かうばかりではなく，意識さえをも超えてより個人的ではない存在論的なことへと向かう」[14]「現象学的超越主義」[15]を指摘する。更に彼の超越主義は「実存哲学を実存する人間を体験と具体性のレベルでの分析し理解する（マルセルなどの）実存哲学とは真っ向から対立する」[16] と指摘する。なぜなら，「そこにいるという［現存在の］『そこ』は，単なる事実としての実存ではなく，これらの経験的所与に達しないそれ以下のところにあって，何ものかがある場所に存在することを可能にすること，を表している」[17] からである。

死の考察に関して，もう一つの相違が見られる。ハイデガーの気遣いは自己自身の死に対してであるが，マルセルは愛する人の死の方に関心を持っている。愛する人の不滅性を立証するために，マルセルは彼にとって形而上学的価値をもつ記憶の役割を援用する。思い出すことによって，愛する亡くなった人のことを考えるという行為は，また相互主観的な行為でもあるので，空間における別離の否定である。記憶は，「目に見えるものを目に見えないものへと移行させる変貌する働き」[18] であり，「ある彼岸」を立証するものである。そしてまたマルセルは特にリルケの『ドゥイノの悲歌』の第９章を彼岸の証人として援用するが，ハイデガーもまた「リルケは『存在と時間』の彼の思想と同じ思想を詩的言語で表現した」[19] と考える。マルセルは，リルケのいくつかのテキストの中に死を個人の完成とみなす，ハイデガーとの特異な類似点を見出す。しかしながら，マルセルは，この類似は決定的なものではないと指摘する。ハイデガーの「死への自由あるいは死を前にした自由はニーチェの運命愛に近く」[20]，マルセルによれば，「その外観にもかかわらず，ハイデガーは理論的ではない実存的な独我論に依然として囚われている」[21]。マルセルもハイデガー固有の概念「世界内存在」を自己の思想に認めているが，両者にとってその概念は，実存と世界との客観的な関係を意味しない。しかしながら，マルセルの「世界内存在」は，相互主観性についての考察に結び付いている身体的存在と関連しており，ハイデガーの死に引き渡される「被投的な［投げ出された］世界内存在」[22] には至らない。

後に『存在と時間』以後の作品に関して，マルセルは，ヴァールが指摘するように，ハイデガーは「存在」を明らかにするために実存から出発しないという意味で，「一種の見解の転回」[23] を認めている。つまり「存在」は，自らを開示し，自らを表わし，人間は言葉が自分に向けられるがままにしなければならない。マルセルは，ハイデガーのお陰で人間の言語の存在論的価値を一層強く意識するようになったと認めている。

しかしながら，ハイデガーが提起する次の二つの問いは，マルセルには疑似問題に思われる。マルセルは，「存在者にとって存在は何か」[24] という第一の問いには意味がないものとみなす。なぜなら，その問いの中に存在者は主体としてあらかじめ想定されているのに対し，彼によれば，「反対に，存在するという行為は，あらゆる特殊化に先立つものである」[25] からである。マルセルは，『ヒューマニズムについて』の中で表現されている「人間は『存在』の隣人である」[26] というハイデガーの言い回しを，「名詞化が極度まで推し進められた（…）不当なやり方」[27] と考える。その上，存在と存在者というハイデガーにとって重要な区別は，マルセルにとってはまったく文法的に思われる。存在は，マルセルによれば，実存において私たちの有限な行為が参与する，あるいはそうすることに呼ばれている充溢し相互主観的な「行為」である。

二番目の問い，「なぜ存在者［有るもの］があって，無があるのではないのか」[28] もマルセルには無意味に思われる。というのは，「この問いを提起することによって，少し考察しただけで現れてくるような，あらゆる問いは実在の根底をあらかじめ想定しているという基本的な所与を認めていない」[29] からである。その実在の根底とは，私たちは存在に浸されているという事実である。したがって，「厳密には，私たちは存在について問うことはできないのである。なぜなら，私たちは存在に基づいてしか問うことができないのであるから」[30]。

ハイデガーにとって存在は，純粋な無ではなく，

「不安の結果」[31] としての無と考えられる。マルセルは彼の第一次大戦における戦争の悲劇的体験がこの思想に影響を与えているのではないかと考える。彼は，『存在と時間』の後にハイデガーが行ったように現象学を放棄しない。なぜならマルセルにとって「存在」は現象学的反省によってしか予感できないものだからである。そしていわゆる「超下降」[32] 的存在である地あるいは冥界の絶対者を復興させようとするハイデガーの試みを，「疑似宗教」[33] の幕開けではないかと彼は危惧する。ハイデガーの「意味存在」も自己開示する「存在」もマルセルの相互主観性の基礎である「存在」ではない。

「存在」と「神聖さ」の親密なつながりを認めるハイデガーの多大な功績に敬服しつつ，マルセルは，意識の構造には還元されない神聖で相互主観的「存在」に近づきうる人間としての隣人をハイデガーが十分に評価しないことを残念に思う。

参考文献

1) Marcel, G: Gabriel Marcel et la pensée allemande, Cahier de l' Association Présence de Gabriel Marcel, Nº1, 27, Aubier, Paris, 1979.
2) Heidegger, M: Sein und Zeit. Halle, Niemeyer, 126-129, ハイデガー：存在と時間，世界の名著62，原祐編，240-244，中央公論社，東京，1971.
3) Cf. De Waelhens, A.: La philosophie de M. Heidegger, 44., Nauwelaerts, Louvain, 1971.
4) Marcel, G.: Autour de Heidegger in, Dieu Vivant, Ⅷ, 93, 1945.
5) Marcel, G.: Autour de Heidegger in, Dieu Vivant, Ⅷ, 93, 1945.
6) Marcel, G.: Autour de Heidegger in, Dieu Vivant, Ⅷ, 93, 1945.
7) Marcel, G.: Autour de Heidegger in, Dieu Vivant, Ⅷ, 99, 1945.
8) Marcel, G.: Mystère de l'être, II, 120, Aubier, Paris. 1951.
9) Heidegger, M: Sein und Zeit., Jahrubuch für Philosophie und phänomenologische Forschung, 8, 272-274 etc., Halle, Niemeyer, 1927．ハイデガー：存在と時間，世界の名著62，原祐編，440-443，中央公論社，東京，1971.
10) Heidegger, M: Sein und Zeit, 274, 277 etc., Halle, Niemeyer, 1927. ハイデガー：存在と時間，世界の名著62，原祐編，446, 449 etc, 中央公論社，東京，1971.
11) Marcel, G.: Être et avoir, 106, Aubier, Paris, 1935.
12) Marcel, G.: Autour de Heidegger, Dieu Vivant, Ⅷ, 99, 1945.
13) Marcel, G.: Pour une sagesse tragique et son au-delà, 73, Plon, Paris, 1968.
14) Thévénaz, P.: De Husserl à Merleau-Ponty Qu'est-ce que la phénoménologie, 63, La Bacconière, Neuchâtel, 1971.
15) Thévénaz, P.: De Husserl à Merleau-Ponty Qu'est-ce que la phénoménologie, 65, La Bacconière, Neuchâtel, 1971.
16) Thévénaz, P.: De Husserl à Merleau-Ponty Qu'est-ce que la phénoménologie, 65, La Bacconière, Neuchâtel, 1971.
17) Thévénaz, P.: De Husserl à Merleau-Ponty Qu'est-ce que la phénoménologie, 63-64, La Bacconière, Neuchâtel, 1971.
18) Marcel, G.: Mystère de l'être, II, 31, Aubier, Paris. 1951.
19) Marcel, G.: Homo viator, 331-332, Aubier, Paris, 1944.
20) Marcel, G.: Homo viator, 332, Aubier, Paris, 1944.
21) Marcel, G.: Pour une sagesse tragique et son au-delà, 190, Plon, Paris, 1968.
22) Heidegger, M: Sein und Zeit. 251-252, Halle, Niemeyer, ハイデガー：存在と時間，世界の名著62，原祐編，411，中央公論社，東京，1971
23) Wahl, J.: Vers la fin de l'ontologie, 162, Sedes, Paris, 1956.
24) Heidegger, M: Qu'est-ce que la philosophie ?, 30, Gallimard, Paris, 1957.
25) Marcel, G.: Pour une sagesse tragique et son au-delà, 82, Plon, Paris, 1968.
26) Heidegger, M: Lettre sur l'humanisme, 108-109, Aubier Montaigne, Paris, 1983.
27) Marcel, G.: Cahier de l' Association Présence de Gabriel Marcel, Nº1, Gabriel Marcel et la pensée allemande, 34, Aubier, Paris, 1979.
28) Heidegger, M: Einführung in die Metaphysik, 3-9, Niemeyer, Tübingen, 1953. Cf. ハイデガー：形而上学入門，4-11，ハイデガー全集40，岩田靖夫他訳，創文社，東京，2000.
29) Marcel, G.: Cahier de l' Association Présence de

Gabriel Marcel, N°1, Gabriel Marcel et la pensée allemande, Cahier 1, 33, Aubier, Paris, 1979.
30) Marcel, G.: Pour une sagesse tragique et son au-delà, 82, Plon, Paris, 1968.
31) Marion, J.-L., L'angoisse de l'ennui, Archives de Philosophie, 43, 135, 1980.
32) Marcel, G.: Autour de Heidegger, Dieu Vivant, Ⅷ, 100, 1945.
33) Marcel, G.: Autour de Heidegger, Dieu Vivant, Ⅷ, 100, 1945.